

令和7年度 新入職員歓迎式典 理事長訓示

日本原子力研究開発機構理事長の小口です。

本日、皆さんを機構の新しい仲間として迎えることができ大変嬉しく思っています。
これから配属された新しい職場で、皆さんそれぞれが思う存分活躍されることを期待しています。

いま、皆さんも日々目にしているように、私たちの周囲で実に大きな変化が起こっています。
それは政治、経済、そして社会など多方面にわたる変化で、かつそれがほぼ同時に起こっています。

政治においては、戦後私たちが当たり前と思っていた国連を中心とする国際平和秩序がロシアのウクライナ侵攻を機に根本から崩れ去ろうとしています。

経済においては、これまでの諸国の経済的繁栄を担保していた自由貿易体制が崩れ、経済のブロック化が進み始めています。

社会については、先進諸国における少子化が進み、移民という名の大規模な民族の移動が常態化し、それにもとない価値観の違いによる激しい衝突が頻発するなど、社会全体が安定を欠きつつあります。
そして何よりも大きな変化は人類が文明活動を始めて以来繁栄の基礎となっていた炭素消費型社会が限界を迎え、新たに炭素を使わない社会の構築に向けて全世界が一斉に動き出していることです。

このような大きな変化の中で、日本も新たな社会システムを再構築してゆかなければなりません。

これらの変化に伴い、原子力もその立ち位置を大きく変えつつあり、原子力機構の役割もまた大きく変化しています。

特に「脱炭素社会の構築に向けて原子力を最大限に活用する」ことを謳った所謂 GX ポリシーは私たちが進むべき航路を照らす新たな灯台と言っても良いでしょう。

この国の方針を受けて、原子力機構は2023年4月に新しいビジョン「ニュークリア×リニューアブルで拓く新しい未来」を制定しました。

それは2050年までの脱炭素社会の実現に向けて、これから原子力機構が目指す研究開発の方向性を示すもので、それは次の3分野から成り立っています。

ひとつ目は、再生可能エネルギーとの相乗効果を目指す「Synergy」分野

ふたつ目は、原子力自体を継続可能なものにする「Sustainable」分野

そして、みつつ目は、原子力を社会の幅広い分野で活用する「Ubiquitous」分野です。

わが国は狭い国土に多くの国民が住み、またエネルギーや食糧と言った国の基盤を支える資源にも恵まれていません。

そのような中で激しい国際競争を勝ち抜いていかなければわが国の将来はありません。その意味で、今を生きる私たち現役世代が将来世代のために安定した社会基盤を整備する義務を負っているものであり、そのためにも原子力を最大限活用してゆくことは必須だと私は考えています。

一方で、福島第一原子力発電所事故を持ち出すまでもなく、原子力はひとつ扱いを誤れば大きな災厄を社会にもたらします。

私たちはこのことを決して忘れてはならず、同時に原子力の研究開発は国民の支持があって初めてなしうることを改めて肝に銘じなければなりません。

また、私たちが日々の研究開発活動のなかで生み出す価値は社会実装して初めて実現するものであることも忘れてはなりません。

即ち、私たちは常に社会を意識して行動する必要があり、決して独りよがりの世界に浸ってはいけません。

私はこの挨拶の初めに「政治」「経済」「社会」という問題に触れました。

不思議に思われた人もいるでしょうが、それはこれからの原子力機構が研究開発を通じて社会に価値を届けるという意味において、これまでにない幅広い視点・視座が求められていることを皆さんに理解して欲しいと思ったからです。

私たちは原子力の問題を原子力科学技術だけで解くことができない時代にいます。

勿論、原子力科学技術は私たちの価値創造活動の根本にあることは間違いありません。

しかしながら、ITや化学、生物といった他の自然科学分野、政治、経済、財政、法律といった社会科学分野、そしてコミュニケーションや心理といった人文科学分野の知識、経験なくして原子力が生み出す価値を社会に届けることはできません。

私はこのことを皆さんに是非ともその本質において理解して欲しいと思っています。

そして幅広い視野から周囲を眺め、自分を眺め、そして自分が進むべき道を各々が明確に定めて頂きたいと思っています。このことは皆さん一人ひとりが自立することを意味します。

こうして皆さんひとりひとりの顔を見ていると、ほぼ半世紀前になる入社式で、緊張の面持ちで社長の挨拶を聞いていた私自身の姿が脳裏に蘇ります。

そして、社会人としてのラストステージに立っている今の自分自身の在り様に思いを致すと、これまでの一日一日の勤めが私の人生の存在意義を決める、まさに置石に思えるのです。

私は原子力に係ることができたことを幸せだと感じ、ここで成果を挙げ、国民社会に価値を届けることが私の人生の総決算に相応しいものだと思っと思っています。

その意味で、スタートラインに立った皆さんと、ゴールに駆けこもうとしている私は同じ価値を追求する同志、戦友だと言っても過言ではありません。

研究職であろうが、技術職であろうが、事務職であろうがゴールを目指すという意味において何らの違いはありません。

私は原子力機構の理事長として皆さんと共に将来の日本のために力を尽くしてまいりたいと思います。

皆さん、ようこそ原子力機構へ。私は理事長として皆さんを心から歓迎します。